第８章　祈りについてのキリストの教え⑥

正しい動機を持つ

イエスは祈りについて、さらに多くの手引きを与えてくださいました。イエスがこれらの教えを否定的な言葉で始めておられることは、軽く扱われるべきではありません。次の箇所で語っておられるのは祈りの動機についてです。

> また、祈るときには、偽善者たちのようであってはいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。（マタイ 6:5-8）

祈りが聞かれるものであるためには、適切な動機から発せられるものでなければなりません。それが第一のルールです。人々の注目と賞賛を集めるためだけに語られる祈りは、祈りなどではなく、自己讃美です。偽善的なパリサイ人たちは、自分の敬虔さを見てもらいたい、賞賛してもらいたいと思っていました。そのため、律法学者たちとともに、人前での長い祈りを非難されています。それを、自分たちが未亡人たちにひどい扱いをしていることを隠すために用いていたからです（マルコ 12:40 参照）。

父なる神に受け入れられるためには、祈りは全能なる方の耳に直接に向けられるものでなければなりません。イエスは私たちが適切な動機で祈れるように、三つの勧めをしてくださっています。**①人の関心を求めることなしに祈ること（5 節）、②隠れて祈ること（6 節）、③無意味な反復はせずに祈ること（7-8 節）の三つ**です。

ご自身に従う者は、祈る時は部屋に入り、扉を閉めるべきだというキリストの教えは、人前での祈りが不適切だということを意味しているわけではありません。強調されているのは、祈りを人々からの賞賛を得る手段とするのは厳に避けるべきだということです。「部屋」（KJV では「（押し入れのような）小部屋」）という言葉は、ギリシア語「タメイオン」の翻訳であり、文字通りには「一番奥の部屋」や「隠れた秘密の部屋」を意味します。つまり、私的な場所ということです。多忙なスケジュールの中でも、様々な必要が差し迫った状況でも、神との交わりのためのプライベートな場所を見つけなければなりません。サムエル・チャドウィックはこれをうまくまとめています。

> 神との密会の場所としては、どこか特定の場所を見つけるべきである。飢え渇いた心であれば、道はあるだろう。野外で、あるいはどこか区切られた一角で、奥まった聖所が見つかるだろう。そのような贅沢が難しいなら、他の人々のいる中であっても、自分だけの世界に入り込める公共の場所を定め、神とのみ共にいる所を決めるのだ。その「内なる小部屋」は、言葉では表せない宝なのである。……神は、人がどこでも祈ることを願っておられるが、その栄光が現されるのは孤独の中である。そこで神は私たちを岩のくぼみに隠し、人がその友と語り合うように、その人に向き合ってお語りくださるのである。

祈りは、献金や断食のように、人知れずなされるべきものです。そうすると、人知れず見てくださっている天の父が、その献身の行為に対して、人々の前で報いを与えてくださるのです（マタイ 6：3-4、18 参照）。定まった時間に街角で祈っているところを見られたいと思っているパリサイ人のような人々は、既に報いをいただいているのです。つまり、願っているとおりの関心を受けてしまっているがゆえに、神からは何も期待することができないのです。

イエスの第二の勧めは、自分を隠すということです。そして、隠れたところにおられる方に祈るのです。「隠れた」という言葉は、ギリシア語の「クリュプトー」（秘密にする）から来ています。「隠れた所で見ておられる」（6 節）神に関係しているように、この言葉は、神の偏在性に注意を向けてくれます。神は人間の目からは隠されていますが、それでも、その隠れた場所にはいてくださいます。祈る人の側でこの現実に気づくことは、信仰を大いに刺激するものとなります。神は隠れた場所での祈りに目を留めてくださいます。その祈りが、ふとした思いに過ぎないものであってもそうです。隠れた祈りに対する人前での報いは、もちろん神からの答えですが、神が隠れた部屋で私たちに会ってくださり、私たちをご自分の宮に変えてくださるというのは、それだけで十分なことなのです。

> 祈りとは魂の切なる願い
> 語られるとも表されずとも
> 隠されたる炎の動き
> 胸の内でぞ躍りたる
>
> 祈りとは息つく重荷
> こぼれ落ちたる涙の粒の粒

上を上を、眼(まなこ)は見つめる
神のみ、近くおわしまするとき

第三の勧めは、「ただ繰り返す」こと（KJV「虚しい反復」）をしないということです。これは、ギリシア語の「バットロゲオー」（考えることなく話す）に由来する言葉です。無意味な、機械的に反復される言葉は、神の心に届きません。神が聞いてくださるのは、唇からの雑音ではなく、**心の叫びです。**ここで責められているのは、祈りを繰り返すことではありません。空しい、心そこにあらずの反復が責められているのです。反復は緊急性を示すこともありますが、同じく、重要なのは心の叫びです。キリストご自身も、同じ言葉を繰り返して祈られました（マタイ 26:44）。ダニエルもそうです（9:18-19）。反復は私たちの一番深いところにある感情を表すことができます。しかし、意味を考えずただ迷信的に繰り返すことは、神を不快にさせてしまい、結果、答えもいただけません。ここで疑問に思う人があるかもしれません。もしも「多くの言葉」を避けるべきで、かつ、天の父なる神は求める前に既に何が必要かを知ってくださっているのならば、そもそもなぜ祈るのかという疑問です。答えは、祈りは単に神に事を訴える以上のものだということです。それは、神のみこころに対する私たちの従順を表現するもの、かつ、神への信仰を働かせるものであり、いずれも、ある意味で、神にはその御手を緩めていただき、私たちの必要に従って事を行動へと移していただくことであるのです。祈りが不足すると、神が私たちに必要だと知ってくださっているものが与えられるのを、妨げることになるのです。

今日、異言で祈ることもまた、同じ言葉を繰り返すだけの一種だと言って、これを拒む人がいます。しかし、聖霊によって祈ることは、その賜物を用いている本人は異言の音の意味を十分にわかっていないとはいえ、単に同じ言葉の繰り返しではありません。聖霊によって与えられる言葉は、決して空しい反復でも、無意味な反復でもないのです。ただし、聖霊に促されることなしに発した言葉をただ反復しようとするなら、それは「同じ言葉の繰り返し」に対するイエスの警告が当てはまることになります。